

7月18日の県本部総会後第1回の県本部理事会が9月12日、新しく理事に選出された塩出美子、森下順子のお二人も出席して開かれました。

冒頭、新任の塩出、森下の両理事からはつらつとした挨拶があり、和やかで活気ある理事会となりました。

理事会では菅首相が政権を投げ出し、目前に迫った総選挙について活発な意見が交わされました。

とくに菅首相の政権投げ出しは、日本学術會議会員の任命拒否とその理由説明の拒否、コロナ感染拡大中のゴーツーキャンペーンごり押し、緊急事態宣言下でのオリンピック・パラリンピック強行など菅首相の憲法や民意、科学を無視した強権的で支離滅裂な政権運営に対する国民の厳しい批判と抗議の高まりに抗しきれずに投げだしたものであるとともに、それは9年に及ぶ「安

## 国賠同盟「3要求」実現のチャンス到来！

そういう中で行われる総選挙は、安倍・菅政治で行き詰まり、

## 第1回県本部理事会報告



熊本県版

No. 233

治安維持法犠牲者

国家賠償要求同盟

熊本県本部

〒862-0954

熊本市中央区神水

1-30-7 コモン神水

☎096-381-1807

# 総選挙勝利、野党連合政権を！

「倍・菅政治」の全面的な破綻の結果である。この点を押さえることが大事であると確認しました。

その観点から見れば、自民党総裁選に立候補している人々はいざれも9年間に及ぶ安倍・菅政治を中心で支え、推進してきた顔ぶればかりであり、誰が新総裁になつても新しい政治の方向は絶対に出でこないこと、にもかかわらずNHKを筆頭にあらゆるメディアが連日連夜、自民党総裁選報道一色に塗りつぶされ、安倍・菅政治の害悪から国民の目をそらし、自民党の中から新しい時代のリーダーが出てくるかのような幻想を振りまいていることに厳しい批判が相次ぎました。

### 運動の基本

ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

一、 治安維持法体制の復活に反対する。

二、 国は戦前の治安維持法が人道に反する惡法であることを認めること。

三、 国は、治安維持法の犠牲者に謝罪と賠償を行つこと。

- ⑤ 国会請願署名  
もう1回「不屈」発送作業を兼ねて
- ⑥ 会員拡大  
来年の全国大会までに結成以来の目標である「2000名の県同盟建設」を必ず達成する
- ⑦ 支部結成  
来年の大会までに天草支部結成につづき、菊池山鹿支部結成を追求する
- ⑧ 映画『伊藤千代子』全県5口確保めざし詰めを急ぐ



林敏哉候補は宣伝活動のため不在でしたが、高崎選対責任者、鵜殿党支部長に「祈必勝」と大書した檄文を渡し、懇談しました。

## 長洲町 林敏哉事務所を訪問し激励

国賠同盟県本部の小田憲郎会長と関根隆事務局長は9月3日（金）、9月21日告示、26日投開票の長洲町議会議員選挙勝利をめざして奮闘している国賠同盟会員の林敏哉候補（新・日本

破綻した日本の政治を、市民と野党の共同の力に支えられた野党連合政権を作り、平和と立憲主義、国民生活優先の政治に根本的に転換する選挙です。

同時に「市民と野党の共闘」に支えられた平和と民主主義を大事にする政権の誕生は、国賠同盟が50年間要求し続け、自民党政権が握りつぶしてきた「国は治安維持法が人道に反する悪法であつたことを認めること」「国は治安維持法犠牲者へ謝罪し賠償をおこなうこと」「国は治安維持法による犠牲の実態を調査し、その内容を公表すること」という「3項目の要求」実現へ大きく近づく選挙でもあります。

## 「要求実現選挙」と位置づけ、全力を!

国賠同盟本部は今度の総選挙を「国賠同盟の要求実現選挙」と位置づけ、全力を挙げて「市民と立憲野党」勢力の勝利のために全力を尽くすことを呼び掛けています。理事会ではこの呼びかけにこたえて、それぞれの持ち場で全力を尽くすことを確認しました。

## その他の確認事項

- ① この間の取り組み

- ② 10月に予定されていた全国女性交流集会は中止となりました
- ③ 理事会の任務分担
- |      |      |       |      |      |
|------|------|-------|------|------|
| 顧問   | 猪飼隆明 | 梶原定義  | 松岡徹  | 板井俊介 |
| 会長   | 小田憲郎 | 副会長   | 遠山直毅 |      |
| 事務局長 | 関根隆  | 事務局次長 | 渡邊靖弘 |      |
| 財政部長 | 稗島英子 | 財政部次長 | 塩出美子 |      |
| 女性部長 | 森下順子 |       |      |      |
- ④ 県本部の活動改善
- 理事会の定期開催（リモート開催も検討する）
- 事務局会議の月2回定期開催
- 1回「不屈」県版の編集会議を兼ねて

共産党）の事務所を訪ね、「祈必勝」の檄文を贈りました。これは、8月の八代市議会議員選挙に立候補し、2期目の当選を果たした橋本徳一郎事務所訪問につづくものです。

コロナ禍で目標の5,000筆を達成するためには、①会員一人一人が身近な人に訴えて5筆、10筆とコツコツ集めること、②いつも協力していただいている友好団体への協力要請を強めること、③新しく10筆でも20筆でもいいので協力団体を開拓すること、を追求する。

## 会員拡大

来年の全国大会までに結成以来の目標である「2000名

## 支部結成

来年の大会までに天草支部結成につづき、菊池山鹿支部結成を追求する

## 映画『伊藤千代子』

全県5口確保めざし詰めを急ぐ

- 天草支部結成準備 10月17日結成予定
- 映画『伊藤千代子』 天草実行委を10月17日結成予定
- 地方選挙支援—国賠同盟会員の候補者に「祈必勝」の檄文を届け激励

- 8月8日 八代市議選・橋本徳一郎候補  
9月3日 長洲町議選・林敏哉候補

- 会員拡大 6月2人 8月2人 9月1人死亡  
現在183人

- ② 10月に予定されていた全国女性交流集会は中止となりました

## ③ 理事会の任務分担

- 顧問 猪飼隆明 梶原定義 松岡徹 板井俊介  
会長 小田憲郎 副会長 遠山直毅  
事務局長 関根隆 事務局次長 渡邊靖弘  
財政部長 稗島英子 財政部次長 塩出美子  
女性部長 森下順子

## ④ 県本部の活動改善

- 理事会の定期開催（リモート開催も検討する）

- 事務局会議の月2回定期開催

## 寄稿文

## 東條英機を激怒させた、ジャーナリスト・吉岡文六

一・日本の敗戦が濃くなつた一九四四年二月二三日、毎日新聞は一面に「竹槍では間に合わぬ 飛行機だ、海洋航空機だ」という記事を発表しました。その頃、東條英機内閣は小中学生にまで「鬼畜米英軍が攻めてきたら竹槍で刺し殺せ」と軍事訓練をさせていましたが、それを真正面から批判したのです。この記事を見た東條は激怒し、新聞の発行禁止を命じるとともに編集局長の吉岡文六らを呼びつけて「誰が書いたのか」と激しく訊問しましたが、〈肥後もつこす〉の吉岡文六は頑として口を割りませんでした。

二・実は、この記事が出る二ヵ月前におなじ人吉出身の海軍少将・高木惣吉が毎日新聞社を訪れ、文六らにただならぬ戦局を語っています。ですから私は「竹槍で間に合わぬ」という言葉は高木惣吉の台詞だと思っています。当時、高木少将は特高や憲兵の監視の眼をかいくぐつて日本を滅亡に導く東條内閣を打倒するために活動していました。

三・記事を書いたのは新名丈夫記者でした。それが判り東條は「新名を激戦地に送れ」と命令しますが、海軍の幹部らが奔走し派兵をくい止めました。編集局長の文六は責任を取つて辞任せに活動していました。

ましたが、七月一八日、東條内閣が崩壊したため八月七日、再び編集局長に復帰しました。しかし、八月一五日の敗戦の時は待命休職中でした。

※（編集の都合で中略）

七・文六をモデルにした小説『通夜の客』の中で井上靖は「元來、その性格は軍国主義など肌にあわぬ根っからのリベラリストで、その書くものは決して軍部から覚えめでたい方ではなかつた。(中略)彼は真っ先にその責任をとつて職を辞した。彼がただ一人の辞職社員であった」と書いています。

八・ではなぜ、文六は戦後直ぐに毎日新聞社に復帰しなかつたのでしょうか?「竹槍では間に合わぬ」の記事には次のように書かれています。「敵が万が一にも、神州の地に来襲しきたらには、われわれ虜醜の辱めを受けんよりは、肉親相刺し、互いに先祖の血を守つて皇土に殉せんのみである」と。文六は戦時に盛んに「鬼畜米英兵に突撃せよ」と号令をかけてきた連中が、米英など連合国に占領された途端に米英などを民主主義の國と言いい出したことが許せなかつたのではないでしようか?そして、自分もなんだかんだと言つても戦争の片棒を担いできたのではないか?いかという自責の念に駆られていたのではないでしようか?

吉岡文六(一八九九~一九四六)享年四七歳。

人吉の偉人に学ぶ会 吉岡弘晴(同盟人吉球磨支部)

## 連載その2

日中戦争の渦中、  
上海で命をかけ反戦闘争  
— 西里竜夫の壮絶な半生 —

小田憲郎

にはまだ自由な雰囲気があり、マルクスやエンゲルスの本などを自由に読めた。また中国人学生との交流などの中で心から中国と中国人を愛し、眞の日中友好のために尽力しようとする学生も少なくなかつたと西里は回想している。

入学後しばらくして、西里の人生に大きな影響をあたえた

「事件」が起きた。

仲が良く、机を並べて講義を聴いていた劉冠相という学生が、西里に「自分はこの民族興亡のとき、じつとここで自分の安逸をむさぼつていることがどうしてできない。僕は、ペンを捨てて、革命運動に参加する!」とそつとささやいて学校を後にしたのだ。

この時期、革命運動に参加するということは、敵の血の弾圧と戦うことを意味する。それは文字通り、生死をかけた決意だった。

「私は、わけもなく感動した。そしてたゞ劉君の顔をじつと見つめていた。劉君は、茫然としている私にただ一言、「再見、再見(さよなら)!」と、別れの言葉を残して立ち去つた。」それつきり彼は、学校から姿を消した。その後の消息はまったく不明だが、おそらく彼は革命運動にその生命を捧げたのであろう。劉君は、人間が真に生きるということはどういうことか、眞実の人生とはどういうものかを、私に強く教えてくれた。私は、劉君こそ、私の人

生に一つの転機を作ってくれた人間だと、今日もなお信じている。」『革命の上海で』三九、四〇頁)

#### 同文書院で社研を組織

命の危険をも顧みず革命運動に身を投じていった劉冠相の生き方に衝撃を受けた西里は、同文書院内で友人とともに社研（社会科学研究会）を組織し、本格的に社会問題の学習、研究にとりくみはじめた。

西里に社研を組織させたのは劉冠相の影響とともに、そのころ日本帝国主義の中国満州（東北部）や山東省などでの侵略拡大に対する中国人民の抵抗が激しくなり、上海でも日本帝国主義に抗議するデモが頻発するなど否応なく日本と中國の関係に関心を持たざるを得なくなっていたということがあつた。

日本国内ではこの時期、一九二八年三月一五日の「三・一五事件」後、東大「新人会」をはじめ各大学の社研がつきつぎに解散させていたが、同文書院の社研は非合法、非公然の組織でなく、のびのびと活動できた。

日本国内でも「対支非干渉同盟」が組織され、「出兵反対！」「支那から手をひけ！」というたたかいが強まつていて。そうした動きを西里は、「三・一五事件」直後の三月一五日に結成された全日本無産者芸術連盟（ナップ）の機關誌「戦旗」

を通じて知った。「戦旗」は、特高警察の厳重な検閲で伏せるという事情もあって、比較的順調に入手できた。また、後には雑誌「マルクス主義」や「インターナショナル」なども手に入れることができるようになった。

西里らはそうした書籍とともに、河上肇の『資本論』の解説や、ブハーリンの『史的唯物論』、また伏せ字だらけの『共产党宣言』を、手に入れた英文の翻訳をもとに伏せ字を埋めながら勉強した。

西里たちは、①中国共産党と中国の革命勢力の動向、②南京の国民政府とくに蒋介石の動向、③日本帝国主義の動向を中心て情報を集め、分析し、正確な情勢の把握につとめた。

#### 学園生活を讃歎

西里たちは社研で侃々諤々の議論を戦わせながらも、学科の勉強にも力を入れた。同文書院はよく落第させる学校で、二年連続して落第すると有無を言わせず放校になつたからだ。ただ、前年のものと全く変わらないものを一時間ノートさせられたり、外国人教師で、ベラベラ英語で講義する英文簿記などまったくやる気の出ない教科などはよくサボつたりした。飲みにもよく出かけた。上海では同文書院の学生は

取りはぐれのない上客ということだったのか特別待遇でよく遊んだ。四年生のときには推されて運動会の応援団長をさせられ大いに奮闘したりもした。

#### 北満への「大旅行」

四年生になると「大旅行」があつた。気の合つた学生が四、五人で班を作つて各人の調査項目を決め、コースも日程も自分で決めて学校の承認を得て行われるもので、経費はすべて学校が負担した。日程は四〇日から五〇日、なかには二ヶ月を超えるものもあつた。すべて学生の自由に任せられたが、卒業論文に匹敵する「調査論文」と「日誌」を提出しなければならなかつた。だから、物見遊山というわけにはいかなかつたが、学生にとっては学園生活最大の魅力ある行事であつた。

西里は四人で班を作り、満州の奉天—海竜—吉林—老頭児溝—間島—朝鮮・清津の北満コースを選び、五〇余日かけて回つた。西里の調査テーマは「満州における朝鮮人問題」で、それは奉天軍閥の張作霖が日本軍（関東軍）に爆殺された後、張学良の支配下にあつた満州が、蒋介石の「全國統一」のもとで、今後どう変貌していくかという関心と、当時六〇万人と言われた満州の朝鮮人—朝鮮における日本帝国主義の苛酷な収奪から土地を失い、満州に流れてきた朝鮮人の農民た

#### 世界恐慌と日本の中国侵略拡大

世界的大恐慌は日本も容赦なく襲つた。浜口雄幸内閣が断行した金輸出解禁（三〇年一月）は、嵐に向つて窓を開いたようなもので、しかも政府の緊縮政策がそれに拍車をかけ、不況の嵐は一気に全産業を巻き込んだ。首切り、賃下げ、労働強化で失業者は巷にあふれた。三〇年春には農業恐慌に発展し、生糸価格暴落をきっかけに米価暴落、野菜暴落とつづき農村経済をことんまで破壊した。東北の農村で娘を身売

りしなければならないほど悲惨な状態が広がり、村役場に「娘売りの場合は「相談ください」という張り紙が出たのはこの頃のことである。当然、労働者、農民の生きるためのたたかいも熾烈になり、激しい弾圧にもかかわらず労働争議、小作争議が激増した。

日本の支配層はこうした人民のたたかいを力づくで押さえつける一方で、「満蒙は日本の生命線」と呼号して中国への侵略を一層拡大し、三十一年満州事変、三十二年「満州國」樹立、三十三年国際連盟脱退と、国際的孤立と中国への本格的侵略拡大に突き進んだ。

#### 新米記者として

三十一年四月、上海日報に政經記者として入社した西里が最初にやらされた仕事は上海標金市場の取材であったが、目まぐるしく変わる金の相場についていけず、日本人仲買人の助けを借りて何とか記事を書きあげたが多くは仲買人が書いたようなものであった。

以来、新聞記者という立場からさまざまところに出入りし、見聞を広め、かつ情報を集めた。日本海軍の練習艦隊が上海に入港した際、社の命令で揚子江を漢口まで遡航する艦隊の旗艦「出雲」に乗ってそのルポルタージュを書いたこともあつた。艦隊の真の目的は中国人に対する示威、恫喝であった。

の下宿先を会場として提案したことであつた。

この作家連盟の総会には二〇名余りが出席し、そのなかには魯迅もいた。魯迅とは既に内山書店の内山完造の紹介で面識があり、内山書店でよく談笑した。総会で西里は日本代表として挨拶してほしいということで日本語でいさつした。

中国左翼美術家連盟の結成には、その中心人物が西里の友人だったことでもあって西里は最初からかかわった。総会会場は、敵の意表をついて、日本海軍陸戦隊のすぐそばの中華料理店の二階全部を西里の名で貸し切り、開催した。この総会で西里は中国語でいさつした。

#### 日支闘争同盟の結成とたたかい

##### まず「中国問題研究会」結成

西里は新聞記者という立場を最大限生かしながら中国の進歩的人士との交流を深めるなかで日本の中国侵略とりわけ激しさを増していた満州侵略を何としても食い止めなければならぬと決意し、在留日本人の進歩的な人々の結集に着手した。手始めに「中国問題研究会」の結成をよびかけ、上海毎日新聞や上海週報の記者らとともに一九三〇年七月頃、研究会を発足させた。主なメンバーは新聞記者関係では西里を中心にして上海毎日新聞の岩橋竹二、船越寿雄、上海日日新聞

つたが、西里は初め艦内生活や寄港地の様子など面白おかしくかき読者には好評であった。しかし、次第に社研や「大旅行」などで得た知識や情報を織り交ぜて中国人民が置かれた厳しい状況や労働者・農民の戦いなども紹介したため、領事館警察から「共産革命に同情的」として記事差し止めとなつたこともあつた。

#### 尾崎秀実を介して中国左翼文化団体と交流

一九三〇年初頭、西里は後にソルゲ事件で死刑に処された尾崎秀実をつうじて中国左翼作家連盟、中国左翼科学者連盟、中国左翼美術家連盟など革命的文化団体と接触をもつようになつた。当時、尾崎は朝日新聞上海支局に特派員として駐在しており、その住居が西里の同文書院の学友で、上海毎日新聞の記者と同じであつたため、親しくなつたものであつた。

その中に沈端先（夏衍・新中国で演劇関係の最高権威者であつたが「文化大革命」のとき打倒目標にされ自殺）もいた。

その沈端先が西里のもとに「左翼科学者連盟」の創立宣言をもちこみ、西里がその全文を翻訳して「上海日報」の文化欄に掲載して日本に紹介した。この時も西里は領事館警察にきびしく叱責された。

また沈端先から「左翼作家連盟の総会を開く安全な会場」を相談され、租界地にあつて比較的安全と思われた西里自身

の手島博俊、上海週報の田中忠夫、川合貞吉、副島竜起、日高為雄、同文書院の事務員加来徹、学生の安斎庫治、白井行幸、水野成、満鉄の小松重雄、それに吳淞路の露地に古本屋をやつていた田代某、中国人で左翼文献の翻訳家温盛光、左翼科学者連盟の王學文ら総勢二〇余人であつた。このほかに同文書院学生の中西功、浜津良勝、河村好雄、新庄憲光、片山康武、坂巻隆が研究会を作つた。

この中国問題研究会はその後の反戦運動の大きな足掛かりとなつた。

このなかで王學文との出会いが大きかつた。王學文は、河上肇の弟子で、京都大学の中退者であり、日本語も上手であった。あとで、王學文が中国共産党江蘇省委員という重要な任務をもつた人物であることを知つたが、優れた理論家でとくに経済問題に明るく、彼に多くのことを学んだ。

#### 日支闘争同盟結成

一九三〇年九月、王學文の指導と援助をうけ「日支闘争同盟」を結成した。それはまったくの非合法組織で、「中国問題研究会」をそのまま移行させたものではなかつた。何名かは参加していない。「日支闘争同盟」という名称を決める時も、いろいろな異論が出、「支那という言葉は中国を蔑視したもの呼び方で、適當ではない」「中国というのが正当な呼び方

だから、日中闘争同盟というのが至当だ」との意見が出た。しかしこの当時までは、「中國」という名称は、一般的の日本人には通用していなかった。討議の結果、日本人にわかり易いようにと「日支闘争同盟」と呼ぶことに決定した。

### 周到な準備と果敢な行動

王学文は、非合法活動のやり方について細かく技術的なこれまで指導してくれた。

西里たちは、在留日本人の結集とともに、日本軍兵士にたいする働きかけを重視したが、実際にやるとなると困難を極めた。ビラ一枚を兵舎に入れるにしても、事前の調査と準備に細心の注意を払い、敵の間隙を突いて素早くやらねばならなかつた。

日支闘争同盟の反戦ビラが日本海軍陸戦隊兵舎にまかれたことに日本の領事館警察も躍起になつて捜査したが、日本人の手でそうしたことがやられたことはかつてなかつたことなので、見当もつかないようであつた。

とくに反響の大きかつたのが、陸戦隊の兵士がとくに多く通る狄思威露の料亭「六・三ガーデン」の新築された新しいコンクリート壁に、ペンキで大書した反戦スローガンであつた。警羅の時間を調査し、真夜中に、道路の上手と下手にそれぞれ二重のピケを張り、西里ともう一人が用意したペンキ

で、ピケの打ち振るたばこの火を合図に、素早くスローガンを大書した。それは正確に巡羅の間隙をぬつて電光石火のように行われた。

これは、一月七日夜、ロシア十月社会主義革命記念カンペニアとしておこなつたもので、つぎのようなスローガンを書いた。

支那から手をひけ！

侵略戦争反対！

日本軍隊は撤退せよ！

日本帝国主義打倒！

労働者・農民・兵士万才！

日支闘争同盟

西里はそれを大きく写真にとり、上海日報で大々的に宣伝した。まさに「自作自演」であつた。警察は犯人探しに血眼になつたが、ついに「犯人」はあがらなかつた。

(以下次号に続く)

### 編集担当より

4頁掲載の吉岡さんの寄稿文、「本人の了解も得ないまま編集の都合で途中省略してしまいました。お詫びいたします。なお、読んで資料が欲しい方は、連絡ください。コピーしてお送りします。 関根 (090-13366-5004)